

【1】 中学部教育の基本的な考え方と教育課程の編成

1 中学部教育の基本的な考え方

中学部はめざす子ども像を「友だちと一緒に、自分らしさを表現しながら仕事や運動に力いっぱい取り組む子」としている。

中学部は、小学部で培った自立化をベースに、社会生活に必要な基礎的な技能の習得や態度づくりに力を入れる段階である。この段階で身につけた力を、青年期に入って社会生活を目前にしている高等部の生活へとつなげ、たくましく生き抜いていける子を発展的に見通し、志向している。

思春期にある中学部の生徒は、身体の著しい成長と共に、大半は第二次性徴の発現を見る。体の中から沸き起こる爆発的なエネルギーで、何にでも挑戦しようとする意欲を見せる反面、自信のなさや照れのため、自己表出に消極的な面も合わせ持つ。また友だちと関わりたいという思いはありながら、その方法がわからないため関わり合いが持てなかつたり場合によっては、衝突やパニックにつながったりすることもある。

小学部での自我の充実・拡大を受け、中学部の生徒を発達的に捉えると、他人との関係を意識しながら、

今の自分よりもっと良くなるために頑張ろうとする意識や態度が育ち始める段階である。社会化に視点をあて、人格形成に期するねらいを持つ中学部の取り組みは、この発達に依拠するものであり、この取り組みで育った力を、高等部での自分づくりの基盤としてつなげていきたい。

図1は、段階別教育内容表Ⅳ段階到達度評価のⅠ男の例である。Ⅰ男は2年半の実践を通して、中学部がめざすⅣ段階にいずれの項目もほぼ到達し、Ⅴ段階への拡がりを見せている。中学部のどの子どもがこのグラフが外に拡がり、「生きて働く力」として定着することを目標としている。

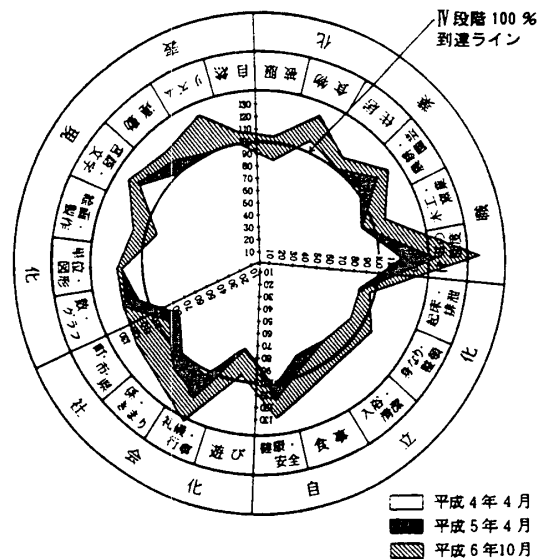


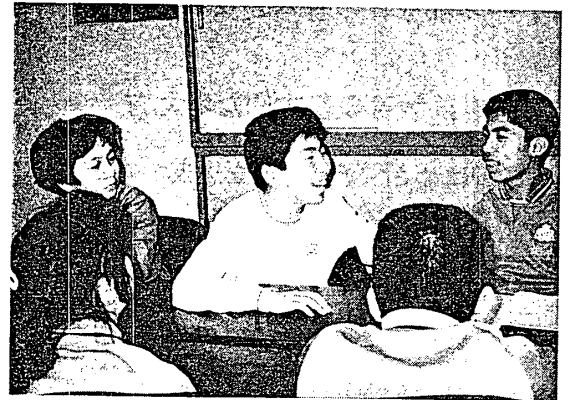
図1 段階別教育内容表Ⅳ段階到達度評価(Ⅰ男)

2 コミュニケーションに視点をあてた取り組み

社会化の拡充は、コミュニケーションそのものとして捉えられる。人はコミュニケーションによって、お互いの関係を成立させる。また、コミュニケーションによって自分自身の内面に問いかけ、自己を高めていく。コミュニケーションが人格形成に大きく関わっていることは、いまさらいうまでもない。そこで中学部では、個人目標にコミュニケーションから迫る具体的な姿を、「楽しんで、豊かに人とかかわる子」として実践していくことになった。これは、「コミュニケーションへの期待や成就感を味わいながら、人との関わりを少しずつ拡げ、合わせてコミュニケーションの基礎的な技能を身につける子」を志向して設定したものである。

生徒のコミュニケーションの実態は、大きく、

- ほとんどの生徒が表出言語を持ち、人との関わりを望んでいる。
- 相手に自分の気持ちがうまく伝えられず、やりとりに拡げられない。



と捉えられる。こうした実態の原因としては、

- 確かに聞き取ったり、表現したりする力が弱い。
- 文章の構成力に劣る。
- コミュニケーションの対象や場が少ない。
- コミュニケーションの対象や場を、自分で拡げる力に劣る。

等が挙げられる。このような生徒がより豊かにコミュニケーションを図り、めざすコミュニケーション像に迫るために、

- より豊かにコミュニケーションを図るための知識や技能を学ばせる。
- 人との関わりを大切に活動しきらせ、十分に生かし使う場を保障する。
- 心とからだを自分なりに受け止め、みつめさせながら、自己を向上させようとする意識を育てる。

という3つの指導方針を立て、指導の方向づけとした。

初年度は、個々の生徒の実態把握に努め、めざすコミュニケーション像とコミュニケーションに関わるつきたい力の検討を重ねた。2年次・3年次は、授業の中でその像をどう実現するか（授業づくり）を模索し続けた。

3 教育課程編成の考え方

中学部の教育は、表1に示す週時表にしたがって実践している。教育課程は生活単元学習を中核にして編成しているが、教育内容や指導形態を精選して取り入れる等、人格形成に資する組み立てを工夫し、指導に当たっている。以下、教育課程編成に当たった考え方を述べる。

- ① 生活単元学習は、題材選定やグループ編成等に工夫をこらし、ダイナミックに活動が展開できる指導形態である。この単元での学習で獲得した満足感、人との好ましい関わり方、社会生活上の基礎的な知識や技能を実生活の中に生かし使い、実践的な力として高めていくよう配慮する。

「力」や「態度」は、繰り返しの学習で、少しずつ定着していくものである。繰り返しの原則・具体操作の原則・スモールステップの原則等を学習の基本とする。また、コミュニケーションを意図した実践場面としているため、話し合い活動や関わり合う場面をできるだけ盛り込むようにしていく。

- ② 課題学習の時間を、毎日20分間帯でとり、継続的に取り組んでいく。

昨年度までは基礎学力の習得をめざし、週3時間を特設して取り組んできたが、今年度は学級担任が個々の生徒の課題を見据え、毎日継続的に取り組むことにする。課題学習の考え方自体も、これまでの基礎学力の習得のみにしぼるのではなく、コミュニケーションを大きな立場で捉えて、養護・訓練

的な課題を含めた取り組みをしていく。担任が指導に当たること、学習内容を日常の生活に直結させたり、家庭との連携指導に当たることが容易になる。

③ 作業学習を4時間設定し、作業を通しての人格形成をめざす。

昨年度までは合同学習の形で取り組んできたが、今年度はコース制とし、4時間を設定した。これは作業経験の拡大、作業態度の修得、遊びと仕事の場の区別、意欲と自信の喚起、趣味の拡がりや余暇利用という5つのねらいをより明確にし、作業学習への取り組みを充実させようとの意図によるものである。コース制とはいえ、学部合同作業や学級ごとの1日作業日等も設け、上記のねらいに迫る取り組みをしていく。作業学習へのこうした意図的な取り組みは、「働く」「作る」といった人間性の基礎作りに関わるものである。自分づくりのスタートラインに立つ中学部の生徒にとって、作業学習の担う役割は大きい。

④ 性教育・同和教育に計画的に取り組む。

ちょうど思春期に当たる中学部の生徒は、第二次性徴の発現をみ、大人の体に近づいていく。この時期に、体の発達のメカニズムについて基礎的な理解を図ることは、自分自身の理解をより深め、自己管理の意欲や態度を育てることになる。

同和教育は、自分自身の心への問いかけである。自分の思いを相手にはっきりと伝える態度や相手の思いを理解しようとする意識を育てる取り組み

は、コミュニケーションそのものといっても過言ではない。人格形成に重要な役割を担う学習として位置づけ、計画的な取り組みをしていく。

性教育・同和教育のいずれも、学級単位で行う生活単元学習の中で指導し、年間10時間程度を当てる。また学習内容によっては、学部全体を縦割りグループに編成して、指導することもある。

⑤ 8時50分から55分間を朝の活動とし、課題学習と朝の会で構成する。本校の1単位時間40分を越える時間設定となっているが、個によっては身辺自立（衣服の着脱）が発達上の最優先課題となるという考え方から、規定の始業時間の前15分間を含めた55分間を、1単位時間として組む。

毎日の継続が確かな力を育てる。このことを確認する実践である。

⑥ 実社会との関わりを大事にし、実践的な力の育ちをめざす。

学習場所は可能なかぎり実社会にも広げ、「ごっこ」や「つもり」で終わってしまわないように配慮する。そのためにも校外学習や校外作業実習等を積極的に計画し、本物でこそ得られる感動や緊張感を大切にしていきたい。

表1 中学部週時表

曜日	月	火	水	木	金	土
時間	登校					
8:50	登校					
9:05	学級活動	朝の活動(更衣・課題学習・朝の会)				
9:45	合同音楽	合同体育	リズム	合同音楽	サーキット	生活単元学習
10:30	長休憩(自由遊び)					
10:45	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習
11:30	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習
12:10	給食準備・給食・給食片付け					着替え 帰りの活動
12:45	洗面・自由遊び					下校
13:10	掃除	掃除				
13:30	作業学習	クラブ	サーキット	合同体育	作業学習	
14:10	作業学習	委員会	着替え 帰りの活動	生活単元学習	作業学習	
14:30	作業学習	委員会	下校	生活単元学習	作業学習	
14:55	着替え			着替え		
15:10	帰りの活動			帰りの活動		
15:30	下校			下校		